



▲ 左から、カルガモ、キンクロハジロ、ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、ヒドリガモ



佐藤 方博

肉眼で鳥を見るので、鳥を見る人だと思われていないようですが、自然景観の中にいる鳥をやさしいまなざしで眺めながら識別するのが楽しいのです。たまに双眼鏡で見たときの模様や色彩は、実に新鮮。

都立井の頭恩賜公園にある井の頭池では、2010年代のカモ類の越冬数は100羽前後で推移していました。ここ数年、カモ類の数が増加しており、2021年度には200羽以上が観察されている日もあります。カモ類の数は、かいぼり後に生育するようになった沈水植物の増加と関係があるようです。

## ◇カモがたくさんいた井の頭池

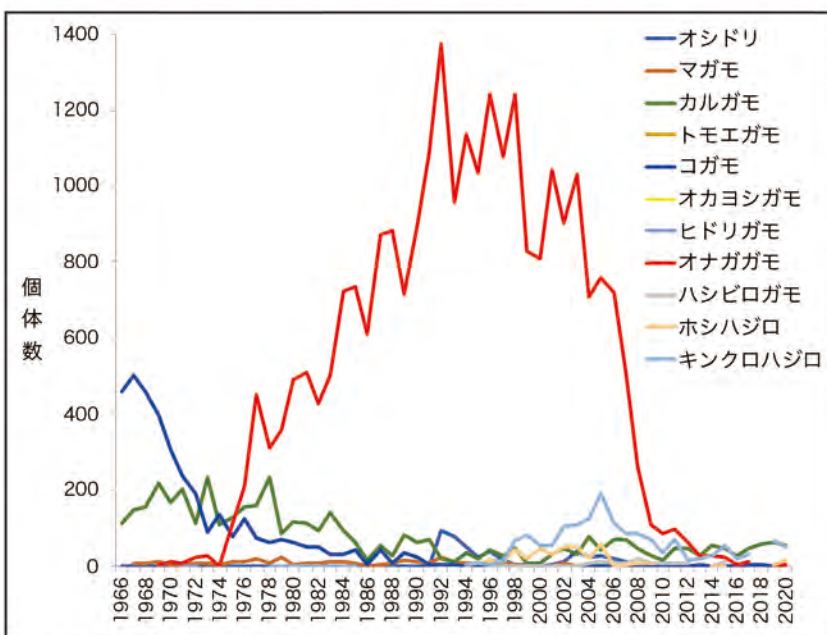
今号ではかいぼりによってカモ類が増えたことを報告しますが、まずは、かいぼりが始まるよりずっと昔に、今よりもっとたくさんのカモ類がいたことについて書きます。

井の頭池のカモ類の越冬数の記録は1966年まで遡ること

ができます(図1)。データからは、1960年代後半にはコガモが多く渡来していたことがわかります。コガモは1970年頃から急激に減少し、代わって1970年代中頃にオナガガモが急増しました。この頃には、来園者が撒くポップコーンやパンを目当てに多数のカモ類が集まり、その大部分はオナガガモでした。カモ類の総数は1000羽を超えていました。

2000年代中頃に井の頭池のカモ類(主にオナガガモ)が減少し始めます。これは東京都全体でのカモ類の個体数推移とも一致しており、広域的な減少傾向の中でのことだと理解できます。

ちょうどカモ類が減少し始めたタイミングで、社会的な環境意識の向上もあり、餌やりは野生動物の生態に影響をおよぼすという問題意識が広がっていました。井の頭池でもその当時、大きな袋いっぱい詰めたパンを撒いている人がいましたが、2007年に東京都と地域団体が餌やり防止キャンペーンを開始したところ、このルールが急速に浸透し、餌やり行為はほぼ解消されました。これにより、井の頭池のカモ類の越冬数は2010年代には100羽前後にまで減少し、自然にある食物で生息できる数に落ち着いたと考えられます。



▲ 図1：井の頭池におけるカモ類越冬数の推移 (1966～2020)  
1966～2012年：井の頭自然文化園の70年  
2013～2020年：環境省自然環境局「ガンカモ類の生息調査」



▲かつてはコイとカモ類への餌やりがよく見られた（2009年）

### ◇増加し始めたカモ

井の頭池では2016年から井の頭かいぼり隊による水鳥モニタリングが行われています。調査を月2回ずつ行い、水鳥の種類と数を記録しています。図1の調査よりも実施頻度が高い分、カモ類の渡来数の変動をより詳細に把握することができます。

6年間のカモ類の個体数推移を図2に示しました。モニタリング開始当初は、冬期に見られるカモ類は100羽前後で推移していました。2019年度は150羽前後が確認され、2021年度はさらに増加して200羽を超えました。

確認種は毎年10種程度で、いずれも関東平野の内陸部の池沼に一般的に分布している種です。数がかつても多いのはカルガモです。ヒドリガモは以前は少数でしたが、2021年度はカルガモとほぼ同数に急増しています。次いで多いのはキンクロハジロで、その他の種は1～数羽、多い日でも10

数羽といったところです。マガモ、ヨシガモ、オカヨシガモは少数ですが、確認頻度は増加しています。

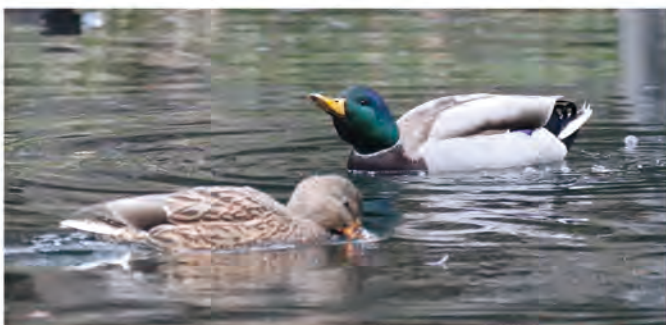
井の頭池で特徴的なのは、コガモが非常に少ないことです。東京都内では珍しい種ではありませんが、井の頭池では冬期、断続的に1～数羽が観察される程度です。井の頭池は池岸の91%が垂直護岸になっていて、本種の採食に適した水深の浅い環境が乏しいことが原因だと考えられます。

### ◇カモを惹きつける沈水植物

井の頭池で近年、カモ類が増加したのはどうしてでしょうか？ そのカギは、かいぼり後に生育するようになった沈水植物（茎や葉が水中にあるタイプの水草）だと考えられています。

井の頭池には、かつては多様な水草が生育していましたが、1960年代に湧水が涸渇してからは、沈水植物が見られない状態が数十年間続いていました。そんな折、2014年にかいぼりを行ったところ、同年に沈水植物のツツイトモやヒロハノエビモの生育が確認されました。特にツツイトモは生育する範囲や密度が順調に増え、2019年には池の全域に分布するようになりました。これはカモ類が増加した年と重なります。ツツイトモは、2021年夏には外来の沈水植物コカナダモに置き換わってしまいました。

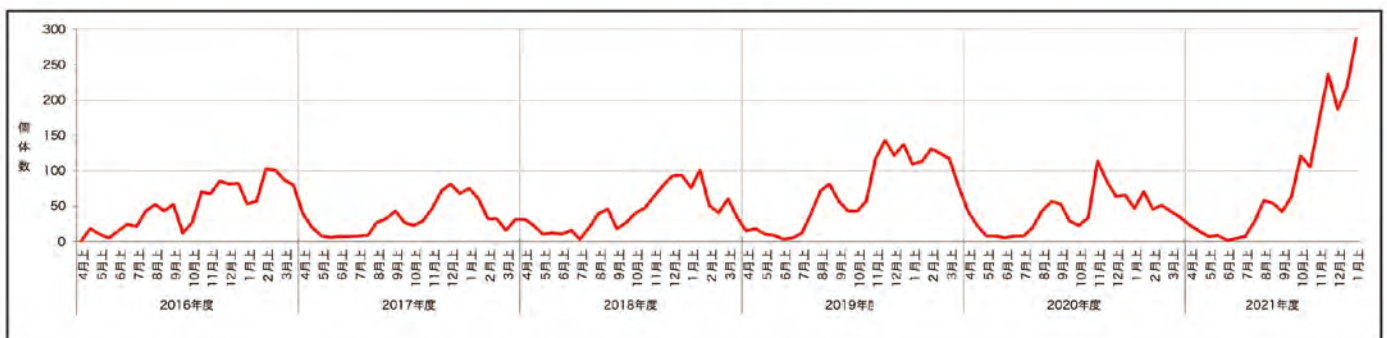
水面に浮かぶカモ類を観察していると、水中に首を伸ばして沈水植物を食いちぎったり、水面を漂う切れ藻をついばんだりしている場面をととてもよく見かけます。かつては、休息や羽づくろいをしたり、ときどき浅場で湿生植物などを採食したりする様子がよく観察されましたが、カモ類の池での過



▲ マガモ



▲ オカヨシガモ



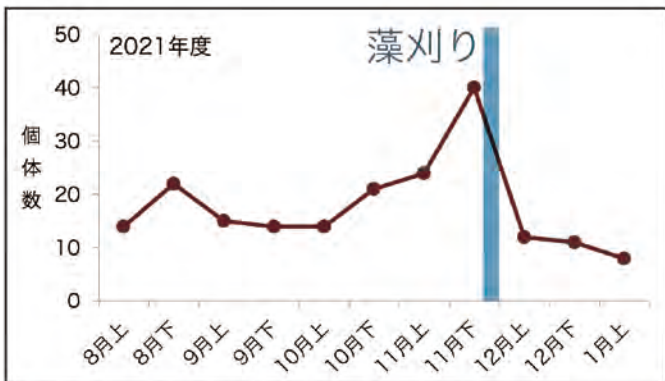
▲ 図2：井の頭池におけるカモ類の月別個体数の推移（2016年度～2021年度）



▲ コカナダモをついばむヒドリガモ

ごし方が変化しているようです。

もうひとつ、カモ類の数と沈水植物の関係性を示すデータを紹介します。井の頭池の弁天池区域で確認されたカモ類の数の、2021年度の月別推移を示したのが図3です。弁天池区域では、東京都がコカナダモ対策として作業船を導入し、11月末に藻刈りを行いました。この作業では、作業船が操作できない杭や橋脚の際を除く大部分の範囲で、水面から1.2mの深さでコカナダモが刈り取られました。この作業以降も、井の頭池全体ではカモ類の数は増加していますが（図2）、弁天池区域では半減しています。弁天池区域は水深が1.5mほどあり、作業後の池底には草丈が低くなったコカナダモが残っています。しかし、それを採食するには、池底付近まで潜水しなければなりません。カモたちは水面付近まで



▲ 図3：カモ類の個体数の月別推移（2021年度）

伸長していて採食しやすいコカナダモを求めて、弁天池区域から別の区域へ移動したと考えられます。

なお2020年度は、前年よりもカモ類の数が減少しました。この年は10月に珪藻類（*Achnanthes catenatum*）が増加して池水が濃い褐色になったために沈水植物が減少しました。

### ◇カモたちが在来水草をついばむ池に！

これまでに示したデータや観察状況から、2019年からカモ類の渡来数が増えた要因は、カモ類の食物となる沈水植物（当初はツツイトモ、2021年は外来種コカナダモ）が増加したことだと考えられます。

井の頭池でカモ類を観察している人の中には、カモたちがコカナダモを食べている状況を見て、外来水草も役に立つ、と肯定的に捉えている人もいます。しかしコカナダモは、侵入先の水域で急激に分布を拡大し、池底を覆って他の水草の生育場所を奪ってしまいます。かいぼり後に井の頭池で確認された在来の沈水植物はすべてがレッドリストに選定されている希少種で、とりわけイノカシラフラスコモは当地が最大の自生地です。カモ類の食物になるのであれば外来水草でも良いということではなく、多様な在来水草や、そこに生息する水生生物も含めた池の環境を保っていくことが大切なのです。



▲ かいぼりで浅くなった池で採食するコガモ

### かいぼりをするとカモが減る？

「カモ類に悪影響があるから、かいぼりをしないでほしい」という意見を聞くことがあります。一般論として、多数のカモ類が越冬している場所でのかいぼりを行った場合、干し上げ期間中はカモ類が周辺水域へ移動しますから、そのシーズンはカモ類の個体数が減少します。翌シーズンは従来通りに渡来すると考えてよいでしょう。もし、カモ類が二度とその場所に戻ってこないのだとしたら、各地でかいぼりを行うたびにカモ類の渡来地が消えていくという話になってしまいます。かいぼりで池の環境や構造、設備を維持管理することによって、カモ類が生息できる環境を長く保つことができます。

こうした誤解や心配を解消するためには、その土地に馴染みのない人が集まる場所——都市部や観光地——でかいぼりを行う際には、普及啓発活動を充実させることが大切です。井の頭池では、干し上げ中に残留していたカモが滞筋（排水路）に集まって採食したり、水深が浅くなったことで普段は見られないコガモが飛来するなどし、「普段とは違う水鳥の様子が興味深かった」という声も聞かれました。こうした観察の楽しみ方を提示することによって、池の現況が変化することに対する不安や拒否感を解消することができるでしょう。